

中心聖句マタイ 28：20b 「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

タラントの譬えは、クリスチャンにとって大切な教えである。年齢や健康状態、経験や能力、仕事、家族構成など、私たちが頂いている賜物の多くは、変わってもいくため、今、自分に与えられている賜物が何であるのかを知り、それらの賜物を神に喜ばれるように存分に用いていくことが求められている。

14-15. 「天の御国は、旅に出るにあたり、自分のしもべたちを呼んで、財産を預ける人のようです。彼は、それぞれの能力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もうひとりには一タラントを渡して旅に出かけた。

このタラントの譬えは、神の国について教えている譬えである。神の国すなわち神のご支配の中に生きる人々のあるべき姿についてイエスは教えておられる。この譬え話の前後でも、イエスは神の国についての色々な話をされているが、それらはどれも、主人が留守にしている間、僕たちが任された任務を忠実に果たすことがテーマとなっている。

譬えの中の、主人とは神のこと、財産を預けられた僕たちとは人間の私たち（特に再臨を待ち望むキリスト者）のことである。1タラントは6千日分の日当であったから、主人は、僕たち一人ひとりにそうとうの信頼を置き期待をもって財産の管理を任せたことが分かる。

このタラントの譬えでは、主人から信頼され財産の管理を任された僕たちが、十分にそれを使い、活用したかどうか問われている。この財産タラントは、単なるお金ではなく、私たちがそれぞれ神から戴いている全ての恵み・賜物を意味するもの。命、生まれた時代や国、健康、才能、性別、容姿、家族、仲間（愛情・サポート）、食物、衣服、住む家、仕事、社会的地位、若さ、経験、知恵、信仰、自由、平和、教会…私たちが預かっているそれらの賜物を、与え手である神に喜ばれるように活かし、用いることが求められている。

この譬えにおいては、主人の留守の間、託されたお金を精いっぱい活用した僕たちは、帰ってきた主人から「よくやった、良い忠実な僕よ」と褒められ喜ばれ、より多くの財産を任されるようになる。しかし主人から託された財産を活用せずにしまいこんでしまった僕は「悪い怠け者の僕だ」と叱責され、お金を取り上げられてしまう。——注目したいのは、21, 23 節で 5 タラント儲けた僕も 2 タラント儲けた僕も、全く同じ言葉で労われていること、大切なことは、それぞれが与えられている賜物を精一杯用い活用することであって、結果を比較し合う必要はないということである。15 節に、それぞれの力に応じて、とあるように、神は、一人ひとりに違った賜物を託され、どんなに大きな成果をもたらしたかよりも、それぞれの与えられた賜物にいかにか忠実に向き合ったかをご覧になっておられる。1 タラント預かった僕は失敗を恐れてそれを土に埋めたが、主が私たちに望んでおられるのは、失敗しないよう細心の注意を払うことではなく、託された賜物を大胆に活用しようとするのである。

——この次の 26 章 1 節で、イエスはご自分が十字架に引き渡されることを予告される。この「引き渡す」と訳されているギリシャ語は、今日の御言葉の「預ける」、「渡す」と同じ言葉。神は、私たちに豊かな賜物と共に、御子であるイエス様をも与えてくださっている。この世界に、また私たち一人ひとりに対して、イエスが与えられている。つまり、期待と信頼だけではなく、赦しと救い、愛と恵みが私たちに注がれているのである。神のご支配の中で生きる人生は、神の裁きをいたずらに恐れるのではなく、イエスを与えてくださった神の愛を信じて、時には大胆さをもって生きること、自由さをもって生きることである。

このイエス・キリストという最大の賜物を受け取り、その愛に結ばれて生きるとき、私たちはそれぞれの賜物にふさわしく向き合い、神の役に立つ忠実な僕として歩むことができる。

賜物には、わかりやすい賜物だけでなく、到底、賜物とは思えないようなものも含まれる。病、障害、弱さ、失敗、苦労、悲しみ…、一見、賜物とは思えないようなものが、その人の賜物となって大きく用いられることがある。イエス・キリストという賜物を受け取り、その愛に結ばれるなら、すべては賜物とされ、豊かに用いられるのである。私たちと共におられる主が、すべてを益として下さり、私たちに豊かに用いて下さることを信じ、主に喜ばれる歩みをささげたい。

